

学生から学んだ詩の読み方

——講演録及び村野四郎「秋の犬」の解釈

藤田 祐史

はじめに

二〇二三年十月に金城学院大学内にて「学生から学んだ詩の読み方」と題し講演をおこなった（日本語日本化学会秋季大会講演会）。前年の四月に同大学へ赴任して以来、「近現代文学講読」及び「女性と文学」という二つの授業において度々日本の近現代詩を扱い、学生たちの新鮮な読解に触れてきた。そこから得たことをまとめたかったことが講演の動機であり、かつ私自身が詩を解釈する楽しみを覚え始めており、その愉悦を学生にも伝えたいという意欲からの主題であった。

文学の授業で詩を扱う利点を挙げてみると、まず多くの詩はプリント一枚に書き写すことが可能で共有がしやすい。小説のように事前に複数枚のコピーやPDFファイルを準備し次の授業時まで読んでくれるよう促す必要もなく、授業時に配るプリントをその場で黙読してもらい、読み解きを始めてもらうことができる。それから、優れた詩は読者の自由な解釈を促す。

小説も同様であろうが、短い詩の場合には詩の背景、人物の設定、詩の「声」と、学生たちの想像によって補われる部分が多い。大学生という読者は受験勉強のための一つの解答を探る読解から解放され、独自の気づきを言葉にしようとしてくれる。そして各々の気づきに不正解はないという約束のなかで各自が読み、自らの考えを言語化し、それを人と共有するためにまた言葉を紡ぎ、授業では教員も複数の言葉を促し掘きながら詩の魅力を再発見していく。と、ここまで書くとも理想論になろうか。現実には、精読に基づかない独りよがりな主張もあり、教員も自らの結論に固執することもあり、愉快適悦なる共通理解に至ることは難しい。さりながら、小さな発見、小さな共有の喜びは毎回の授業にあり、詩の読み方に厚み加わる瞬間は心地よい。講演はそのような幸福な時間のフィードバック、教員も学生の皆さんからこんなふうに学んでいますよ、と贈り返す時間になれば成功だったのだが、果たしてどうか。

本文は講演録として当日の原稿に加筆修正するかたちでまとめ。第一節から第四節で扱われる詩は順に、伊藤比呂美「ナシテ、モーネン」(『わたしはあんじゅひめ子である』思潮社、一九九三年)、村野四郎「秋の犬」(『実在の岸边』創元社、一九五二年)、草野心平「秋の夜の会話」(『第百階級』銅鑼社、一九二八年)の計三篇、それから講演内でおまけとして扱った俳句一句である。各節の文章は「です・ます調」のままとし、講演当日の記録となるように記している。なお、講演中の先行論への言及は通常の論文と異なり十分でない懸念があるので、この稿では注のかたちで補う。加えて、講演録とは別に村野四郎「秋の犬」を扱う第五節を設ける。「秋の犬」については質疑応答の場や講演後の会話の中で聞き手から新しい解釈が示された。第五節ではそのような反応を受けて、私自身の「秋の犬」小考を展開する。以上のように本論は変則の形式になるが、詩を扱う授業の一例として、村野四郎「秋の犬」解釈を示す一例として、検討を深める試論としたい。

一 伊藤比呂美「ナシテ、モーネン」の授業から学んだこと

本日は「学生から学んだ詩の読み方」と題しまして、一時間ほど講演いたします。一年生の方が大半のようですので初めましての方もいらっしやると思います。私はこの学科で近現代の日本文学、特に詩や短歌、それから俳句について教えています。

今日は日々の授業を通して学生の皆さんから学んだことを、具体的な詩の読解と共に幾つかお伝えしたいと思います。画面に資料一から三とあるのは、両面印刷の紙の資料が一枚お手元にあるかと思いますが、そちらの番号に対応しています。資料一が伊藤比呂美「ナシテ、モーネン」、資料二が村野四郎「秋の犬」、資料三が草野心平「秋の夜の会話」です。これらの詩をいっしょに読み解いていきます。流れとしては、それぞれの詩について黙読・朗読の後、簡単な解説・質問、まとめの順に進みます。今日は皆さんからのコメントを共有して議論し合う時間とはとれませんが、この講演を通して詩について考える時間になつてほしい、詩を解釈する楽しさを知ってほしい、と願っていますので、ところどころで私が用意してきた質問について考えながら聞いていただければと思います。

それでは早速ですが、資料一の「ナシテ、モーネン」から読んでいきます。不思議な題の詩ですよ。「ナシテ、モーネン」とは何なのか。解説から始めても良いのでしょうか、詩の読み解きは第一印象を大事にして欲しいと思いますので、まず黙読の時間をとります。その際、画面でも「あなたならどのような声で読みますか、またそれはなぜですか」と書いているように、詩の声を意識して、各自自分の「読み」を試してください。黙読の時間は短めに三分間程度とします。それでは読み始めてください。

(黙読)

はい、いかががでしょうか。まだ読んでいる途中の方もいると思いますし、読み終わった人は、長い詩だなあとか、詩を読んだのは高校の授業以来で新鮮とか、いろいろな感想が生まれていると思います。この詩の作者の伊藤比呂美さんは現役で活躍されている詩人です。作者についての説明を今日は割愛しますが、「ナシテ、モーネン」は伊藤比呂美の思いをそのまま詩にした作品ではなく、どうやら小泉セツという人物の思いを詩にした作品のようだ、と気づかれたでしょうか。詩と聞くと、作者の思いを美しい文章で表現したものだ、という印象があるかもしれませんが、これはどうもそのような詩ではないらしい。詩の中の「わたし」は小泉セツであって、詩人伊藤比呂美ではないらしい。では、小泉セツとは何者なのか。その解説に進む前に私が朗読をしてみます。詩は声に出すことで、印象が大きく変わることがあります。朗読がそのまま詩の解釈になることがある。今回皆さんの印象が変わるかはわかりませんが、聞いてください。

(朗読)

はい、いかががでしょうか。黙読のときとは異なる感想が各々の内に生じていると思います。本当は授業のようにこの時点での感想を一度言語化してもらいたいのですが、今日は解説に移りますので、引き続き資料一を見ながらお聞きください。

詩の最後の箇所「熊本滞在時代につくられた小泉セツの英語覚え書帳から引用・参照」と書かれていますね。先ほどから何度も出てきている名前です。皆さんのなかで、この人物を知っています、という方はいらっしゃいますでしょうか。おそらく小泉セツあるいは小泉節子の名を聞いたことがない人が大半かと思います。それでは小泉八雲あるいはラフカディオ・ハーンという名前はご存知でしょうか。おそらく、聞いたことがある、知っています、という人の数が増えるかと思います。

画面をご覧ください(ラフカディオ・ハーンの写真・著作を映す)。ラフカディオ・ハーン、日本名小泉八雲は一八九〇年、明治二三年に来日し、日本では英語、それから文学を教えました。その最初の赴任先が島根県の松江です。現在の松江市の場所を思い浮かべてくださいね、島根県の県庁所在地、鳥取県の隣、日本海側の宍道湖という大きな湖のある美しい町ですね。ハーンはその松江でセツに出会っている。その後、ハーンとセツは松江から今回の詩の舞台である熊本に移り、さらにハーンは東京の大学で教壇に立ち、多くの日本人から尊敬される存在になっていきますが、ここでは彼らの熊本時代を見ていきます。

画面では下の方に「1892「英語覚え書帳」の勉強↑中の時間」と書かれているように「ナシテ、モーネン」という詩は、一八九二年頃の小泉セツの思いをその百年ほど後に現代の詩人が詩にした。大げさに言うとうと、伊藤比呂美が今は亡き小

泉セツを自らに憑依させて書いたのが「ナシテ、モーネン」です。⁽⁴⁾ここからは解説を加えながら読んでいきます。

(解説)

早足の解説でしたのでわかりにくい箇所も残ったと思います。が、黙読と朗読で詩の印象が変わるように、解説を聞くことで詩の印象が変わるんだな、と感じていただければ、今日はそれで十分なのかな、と思います。さて、ここからようやく今日の講演の題目でもある「学生から学んだ詩の読み方」を話していきます。

思い出していただくと、最初に皆さんに対する質問として示したのが「あなたならどのような声で読みますか」という問いでした。それに対し、授業で私の朗読を聞いた学生からは次のような感想が出てきました。「焦り」「独占欲」「執着心」「強い恋心」と画面に映しているように、このような言葉が詩の中の「わたし」のイメージとして浮かんだ、というコメントが出てくる。「独占欲」のような想定していた答えもあり、一方で「焦り」と聞いて、おそらく私の早口な朗読から焦る心情を捉えたのかな、とかあれこれ考えさせられます。皆さんも先ほど朗読を聞いて、それぞれに感想を抱いたと思います。

それから授業で、あなたは最初にどのような小泉セツの声を思い浮かべたか、朗読するならどのような声で読むか、という先の問いを向けますと、次のような言葉が出てくる。画面に映

していますように、「静か」「眩き」「儂さ」「劣等感」などですか。がででしょうか。賛成です、私も詩を黙読したときに囁くように語る人物像を思い浮かべていました、という人もいるかもしれない。私としてはこのような回答が複数の学生から出てきたことが意外だったんですね。「ナシテ、モーネン」は作者の伊藤比呂美さん朗読されていて、CDやYouTubeで聞くことができます。⁽⁵⁾私は何度かそれを聞いていますし、私の朗読は詩人の朗読に意識的に寄せていた部分も多く、そのような私の声に優しく静かな小泉セツは表れていなかったと思うのです。しかし、例えば詩の途中に、「もっととべんきょうしてせめてあの男の子たちのように、／彼の言語を理解できるようになりたかった」という文がありました。この箇所を、小さな声でつぶやくように、祈るように、羨むように声にすると（朗読を試す）、詩の印象が変わってくるかと思えます。

それでは、どのような声が正しいのか、はわからない。もちろん、今画面に映しているように小泉セツは実在した人物です。なので、この人について書かれた本を読み、その人に関する歴史的な事実や性格を調べることで、その声を探ることはできます。しかし、もっと大切なのはこの詩の精読から、あなたがどのように考えてどのように声に出して読むか、です。ぼそっぼそっ、と途切れ途切れの声のイメージを抱いたのであれば、それもまた詩の解釈として面白い。画面では、声に出して考えることも

詩の解釈になる、と書いていますが、この詩に限らず私の想像とは異なる詩の声を学生が発見してくれることがあります。別の詩の話ですが、男性の声として私が想像していた詩が女性の声の詩に変わるとき、あるいは、四十代の疲れた男の声で捉えていた詩が二十代の若者の澆漓とした声で読みかえられるとき、当然ながら詩の印象が変わります。もう少し言うと、AからBに変化する、というより、AのイメージにBのイメージが加えられて、詩が豊かになる。書きますと、「A→B 1のまま」ではなく、「A+B 2」あるいは「+C+D+… 複数」というかたちでしょうか。詩の新しい読み方を、声の探究を通して学生が創りだしていく。それが作品の層ようになっていく、あるいは樹木の年輪のように詩の厚みになっていく。今回の話は、本当は今日のような大人数の講演や授業より少人数のゼミで実際に声に出し合いながらお互いに考え合うのがふさわしいかもしれません。ただ、ここでは声を想像することが詩を味わうことになることを「ナシテ、モーネン」を例に紹介しました。

二 村野四郎「秋の犬」の授業から学んだこと

つづけて資料二、村野四郎という一九〇一年生まれの詩人が書いた「秋の犬」について話していきます。詩人についての伝記的な説明は割愛します。さて、最近一気に気温が下がってきましたね。この詩の季節は夏が終わり、秋の気配が訪れる頃の

詩です。そんな今よりも少し前の空気を思い出しながら読んでもらえればと思います。先ほどと同様に黙読から、その後には朗読、解説の順に進めていきます。それでは二分だけ時間をとりますので、黙読をお願いします。

(黙読)

いかがでしょうか。読みながらどのような場面を想像したでしょうか。この詩は読んでいるとたくさん疑問が出てくる。「神さまに似た人」って何だろう。この詩の中に出てくる「永遠」って何だろう。「何かやさしいもの」って何だろう。具体的にイメージできない抽象的な言葉について皆さんは何を想像しましたか、と授業でしたら問いかけるのですが、今日は画面に映している通り質問は一つだけです。この詩に出てくる「おれ」は人ですか、犬ですか。朗読してみますので、この点を考えながら聞いてみてください。

(朗読)

問いを繰り返します。この詩に出てくる「おれ」は人ですか、犬ですか。先の詩と違って一行一行解説を加えていく時間はなさそうですので、注目して欲しい箇所のみを見ていきます。まず詩の真ん中あたり、第三連をご覧ください。こんな表現があります。「とある道端の 積みかさなつた石塊（いしころ）の間に／おれは 犬のようにすわつていた／ガラスの眼球に枯梗の空間がうつつていた」。「犬のようにすわつていた」と書いてあ

るので、「おれ」は人なのか。あるいは詩の最後の行を見てもらうと、「おれは熱い舌をたらししていた」とあるので、「おれ」は犬なのか、それとも人が犬のように舌をたらししているのか。人なのか犬なのか。この問いに対する元々の私の考えは、人としても犬としても読める、という曖昧な解釈でして、どちらかという決定よりは、この詩が書かれた戦後の町には野良犬がいて、物乞いをする人がいて、そういう戦後の空間がありまして、そのような人と犬の区別がつかなくなる事態に目を凝らすことが大切な詩なのか、と考えていたわけです。

それに対し一人の学生が次のように答えてくれた。画面をご覧ください。学生の解釈を読みますと、「おれ」は犬でも人でもなく犬のかたちをした置物である、と答えるのです。この答えには驚きがある。そもそも教員が用意した問いでは、人か犬かと問われていたのですが、いや、人でも犬でもなく物なんだよ、と前提を無視して答えを出してきたわけです。その根拠として、例えば先ほど読みました「おれは犬のようにすわっていた」という文の後に、「ガラスの眼球に枯梗の花が映っていた」とある。この「ガラスの眼球」を私は比喻として読んでいました。それに対し学生は比喻ではなく、これはほんとうに「ガラスの眼球」なのだ、という主張ですね。この詩に出てくる「おれ」が置物だとすれば、そのように読める。繰り返すとこの詩は、詩人が「おれ」という犬のような人を表現した詩でもなく、犬の気持ちに

なって読んだ詩でもなく、捨てられたのか焼け出されたのか、道の隅に転がっている犬の置物の思いを詩にした、という仮説が生まれる。もちろんこの解釈には反論もあると思います。

ここでも大切なのは、どの解釈が正しいのか、ではありません。自分なりの考え、この場合ですと、「おれ」は置物であるという仮説を用意し、さらには「ガラスの眼球」を根拠にしてそれを伝えられるということ。画面には「前提を疑うことで解釈が広がる」と学生から学んだことを示していますが、今回であれば私の設定した人か犬かの問いが皆さんの想像力を制限していません。それを破って答えようとしてくれる学生がいること。教員としては問いを設定することで、何に注目すればいいのか、学生の詩の読解を助けようと思図しているわけです。しかし、その問いにそもそも想像力を制限する力がかけられていることがある。問いを立てること自体は詩に限らず問題を分析するために大切なことではありますが、教員側が前提を作ることの弊害もまた意識しなければならない、と反省を促された学びでもありました。

三 草野心平「秋の夜の会話」の授業から学んだこと

最後に、資料三「秋の夜の会話」を読んでいきます。やはり黙読から始めましょう。今日ここまで二つの詩を読んできて、詩を読むことにも慣れてきたかと思えます。「秋の夜の会話」を

読む際には、最初の「ナシテ、モーネン」で覚えた声を考えること、それから先ほど「秋の犬」で覚えた問いに含まれている前提を疑うこと、この二つを意識して読んでみましょう。私からの問いは、この詩は何と何の会話なのか、です。それでは黙読をお願いします。

(黙読)

いかがでしょうか。どのような声が聞こえてきたでしょうか。画面には、この詩に対する問いを詳しく載せています。読みますと、「詩のなかの話し手を、仮にAとBとします。十四行ある詩の各文の先頭に、Aの台詞ならA、Bの台詞ならBと書いて、そのように割り振る理由も考えてみましょう」という問いです。朗読してみますので、聞きながら考えてみましょう。

(朗読)

皆さんの答えはまとまったでしょうか。また、詩の中の会話の最後に「ずれ」が生じたことに気づかれたでしょうか。まずこの詩について解説を加えていきます。この詩は本日紹介した詩の中では比較的有名な詩ですからご存知の方もいるかと思いますが、「秋の夜の会話」は蛙と蛙の会話として読まれてきた作品です。作者の草野心平は「蛙の詩人」と言われることもあり、皆さんの中にも蛙同士の会話であることを念頭に問いの答えを考えてくれた人もいます。

それにしても、詩という文芸は詩人の思いを伝えるだけでは

ないんですよ。百年前の女性になったり、戦後の犬になったり、置物になったり、蛙の語り合いも表現する。皆さんは秋の夜の会話を何と何の会話として読みましたか。蛙なんて思いも寄らなかった、という人もいます。授業でも、飢餓の状況の人間を想像していた、という答えが出てくることもあります。この詩から東北地方における飢饉の歴史を思い起す人もいます。しかし今回私自身は、これは蛙の詩だという前提からは逃げられず、Aの蛙とBの蛙が交互に言葉を発する姿をイメージしました。先ほどの問いへの答えのかたちで書きますと、詩の十四行は、A B A B A B A B A B A B A B A Bの繰り返しです。最後の二行の「ずれ」については資料三の後ろの六行目から改めて読みますと、次のように書かれています。

どかがこんなに切ないんだらうね。／腹だらうかね。／腹とつたら死ぬだらうね。／死にたかあないね。／さむいね。／ああ蟲がないでるね。

最後の二行、こだけ会話がかみ合っていない。「さむいね」というAの蛙の台詞にBの蛙は「ああさむいね」ではなく、「ああ蟲が鳴いているね」と答える。これについての解釈を教科書のように答えるなら、Bの蛙は冬眠に入りかけているのか、正常な答えを返す能力を失いつつある、と考えることができます。

あるいは、Aが「さむいね」と言うのに対し、Bからの返答はない、Bの蛙は既に答えられない状態になっている。しーんとした静まりに耳をすまし、Aの蛙が再び「ああ蟲がないてるね」と感慨深く口にする様子も想像できるのではないか。この場合、問いの答えはA B A B A B A B A B A B Aに代わります。皆さんはどのような声を想像し、自分なりの答えを考えたいでしょうか。

画面をご覧ください。画面の上側は、私が今話しました私の解釈、正確には広く受け入れられているAの蛙とBの蛙が言葉を交わしていきながら、最後の二行に何かがあったと想像する例です。それに対して授業でこの詩を取り扱ったときに、次のような学生の答えがありました。

A B C D E F G H I J K L M N

これは蛙を想像するのだけれども蛙は二匹ではなく、複数の蛙たちが好き勝手に自分の言いたいことを声に出しているのではないか、という想像です。この答えにも驚きましたね。思えば蛙の鳴き声を聞くとき、一匹の蛙が鳴いてそれに応えて別の蛙が鳴いて、という応答の連続を聞いた記憶がない。春の水辺のにぎやかさとは違ってここでは冬も近い秋の夜ではあるけれども、蛙の声が聞こえたとすれば暗闇からぼそぼそこぼれてく

る複数の声であるほうが想像しやすい。詩人はこのような幾つかの声を「会話」として聞き取ったのではないか、というのが学生の読み方です。AとBという前提を破りながらちゃんと詩に出会ってくれている。

そして、ここまで資料一、二の詩の読解でも話してきたように、A B C D : という複数の説が正しいか、AとBの会話説が正しいか、そもそも蛙の会話という捉え方が正しいか、というのは一番大事な問題ではない。複数の解釈が加わることで、「秋の夜の会話」という作品が豊かになっていく感覚を大切にしたいのです。画面には「声を考える+前提を疑う=新しい解釈」と書きましたが、新しい解釈は正しい解釈ではありません。新しい解釈は詩を面白くする力です、いっしょに詩を読んでいる人たちの自由な発想を促す力にもなります。この講演は学生の皆さんから学んだ詩の読み方について、また詩の解釈の喜びを伝えることがねらいでしたが、皆さんも今日の話を聞きながら各々の空想を遊んでくれたかと思います。皆さんなりの解釈は、二年生になって私の授業を受講した際に、そのオリジナルの発想を堂々と言語化してもらえれば嬉しいですよ。

この後は質疑応答の時間を取りまして、時間が余るようであればもう一つ俳句についておまけのような準備をしておりますので、その話もできればと思います。いったんここまでで講演を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

四 俳句の授業から学んだこと

(質疑応答が終わり、おまけとして用意していた話を司会者から促されて)

皆さま、ご質問ありがとうございました。村野四郎の「秋の犬」に出てくる「おれ」は既に死んでいるのではないかと、という目が覚められるような見解や、草野心平の「秋の夜の会話」に出てくるのはAの蛙のみで会話をしているのは幻、言わばイマジナリーフレンドと語り合っているのではないかと、といった今後の授業でも伝えていきたい解釈を頂戴でき楽しんでおります。まだ若干の時間があるようですのでおまけとして、学生から学んだ俳句の読み方を一つお話できればと思います。

空近き席となりたる新学期 川島葵⁸⁾

画面をご覧ください。シンプルに俳句が一句と、それから問いとして、この俳句の季節はいつですか、と質問が書いてあります。俳句とは、これは説明不要でしょうが、五・七・五の十七音で、季節をあらわす季語と言われる言葉が含まれる短い詩です。画面の俳句ですと、空近きで五音、席となりたるで七音、新学期で五音、計十七音の作品です。ではこの俳句の季節はいつでしょうか。この俳句から春夏秋冬のどの季節が伝わってくるでしょうか。

場面は想像できると思います。「新学期」になる。席替えがある。「空近き席」になった。しかし、「新学期」と言っても大学では前期と後期がありますし、席替えがあるような高校時代までを思い出しても、一学期、二学期、三学期とあつて一つの季節に絞ることができない。季語のない俳句、無季の俳句も実際に存在しますが、果たしてこの俳句から季節を感じ取ることはできないのでしょうか。

私もいろいろと考えたのですが、例えば「入学」あるいは「進級」という言葉でしたら春の季語として使えますので、その連想で新学期を春と捉えられるかな、とか、秋の学期は「秋学期」を秋の季語とし、単に「新学期」と言えば春の季語と考えることも不可能ではないかな、とか、迷うわけですね。それに対し、一人の学生がこの俳句に対し、この俳句の季語はわからないけれども、季節は春だと答えてくれた。その理由が興味深かったので紹介したいのですが、皆さんはこの俳句が仮に春の俳句として、どこにその理由を見出せるでしょうか。考える手がかりは「空近き」という言葉をどのように考えるか、です。いかがでしょうか。

「空近き」を具体的に想像できた人はもしかしたら、ああそういうことか、と気づかれたかもしれません。私自身は「空近き」を横の空間把握と言いますか、教室の廊下側ではなく、空の近い窓際の席になったのかな、と考えていたんですね。その場合

には明るい空気感は伝わってきてもどの季節なのか、はわからない。それでは、空が近くなることについて他にどのような考えられるか。「空高し」や「天高し」といった季語が俳句にはあります。秋の季語ですね。入道雲がゆつたりと動いていた夏の空から天が高くなり、大きな雲はくだけて、細かなうろこ雲が足早に流れていく。そんな空の高さの変化を考えると、これは空が近いのだから秋の俳句ではないな、と検討をつけることはできません。しかし、決定的に季節をあらわす表現はないのではないか。

それに対して学生の見解は、これは春です、空が近くなる「新学期」は春だけです、と言うのですね。謎を解き明かしますと、この学生は小学生の教室をイメージしてくれていたんです。学校によって違いはあるのですが、小学校では体力的な配慮から低学年は下の階に教室が設置され、学年があがるにつれて上階に行くことが多い。この詩は一つ空が高くなったという縦の空間把握、しかも空の上下ではなく、教室と子供たちの上方への動きによる進学と成長の嬉しさを伝える俳句だという解釈です。

この解釈も面白かったですね。結局、季語は「新学期」になるのかならないのか、という議論は別に出てきそうですが、小学生という私が忘れていた記憶を学生は活かしながら俳句を読み解いたわけです。今日の講演でも伝えたように、この読み方

が正しいというのではなく、このような読み方もあるんだ、と知ること俳句の味わいが深められたように感じていただければありがたいです。俳句についても授業で取り扱っていますが、短い言葉の詩である俳句は読み手の想像力を信頼し、解釈を委ねてきます。これは俳句という文芸の楽しさですので、味わう私たちはたっぶりの想像力をもって応えたいところです。さて、だいたい時間になったようですね。以上で私の講演を終了とします。本日はありがとうございました。

五 「秋の犬」の解釈

講演録としての記述は前節までで終わりとし、村野四郎「秋の犬」については「はじめに」でも記した通りこの節で論じる。「秋の犬」については講演の質疑応答及び終了後の院生との会話において新しい解釈が提示された。そのなかに、人なのか犬なのかを問われていた作中の「おれ」は人の死体ではないか、あるいは死につつある人なのではないか、との新説があった。講演内で学生の解釈として紹介した「おれ」＝置物という意見と同様に興味深い、「おれ」＝死体という詩全体の印象を変えるような新たな発想である。その答えに至る論理については聞き違ひもあるだろうから詳述は避けるが、詩中の「それは蝸虫といっしょに／おれの内部にしか無い、ということ」の部分の根拠に引くことで、「おれ」＝置物説を否定し、自説を論じられていた。

根拠を示しながら文学作品の解釈を語り合う面白さを学生にも伝えられる良い質疑応答の時間になったかと思う。

さて、それでは「おれ」は人なのか、犬なのか、物なのか、死体なのか何なのか。詩人自身は次のような言葉を詩「秋の犬」に向けて残している。

私の詩には、このようにの *ein zu Ende* (終末への存在) を基調とする考え方がながれています。私の詩は急に暗くなつたようです。何か「死」の庇の下にでもはいったようです¹⁷⁾

このような詩人の発言を読むと、「おれ」＝死体という着想に通じる死の感覚は詩人本人にも意識されていたことがわかる。菊田守は上記の村野四郎の見解も踏まえた上で、「秋の犬」を次のように分析している。

また「おれには主人がなかったこと」とは、何も頼りになるひと(もの)がないということである。自分が信じていたひと(もの)が、次々と信じられなくなつていったたくさんの不幸、そこには見おぼえのある人などなく、ただ熱い舌を垂らしていたというのだ。「おれは 熱い舌を垂らしていた」という現実、内部の苦痛に耐えて闘っている姿を見事に描き出して余す所がないと思うのである。

菊田は外部ではなく、内部しか信じられなくなった人間の「冷え冷えとしたもの」を詩人の思想を踏まえて看取する。死のほかに「絶対」はないことを悟る「おれ」の思いが推し測られ、講演内の問い(「おれ」は人なのか犬なのか)への答えとしてまとめらるなら、「おれ」は死以外を信じられなくなった人である、という具体像＝詩人像が浮かび上がる。それでは、詩人の言説・存在を重視するならば、「おれ」＝犬、「おれ」＝置物、「おれ」＝死体という仮説は不可能になるのだろうか。以下、「秋の犬」の題名に含まれる秋と犬という二つの言葉に注目し、村野四郎の戦後の詩における同じ言葉の使われ方を照らし合わせながら、「秋の犬」解釈の可能性を広げてみたい。

秋についてから始めよう。「秋の犬」と題がつけられているように、秋であることが当該詩では肝要なようだ。舞台は「コスモス」「桔梗」と秋の花が彩る空間である。村野四郎の秋のはじまりは明るい。が、残酷な明るさでもある。

秋の日は まさに／神の殺られた日のごとく／悲哀は万物を はつきりと見せ／無限の空虚に輝くのであった。¹⁸⁾
六一―二五七頁)

上記は「秋の犬」の収められた『実在の岸辺』に先行する村

野の詩集『予感』に収載の詩「明るい秋」の一節である。万事を明るみに出す秋の日は「悲哀」の感情にも置き換えられる。同詩には「私にとって／すべて見しらぬ人のようだ／けれども私も人ではない」（二五六頁）ともある。秋の日が見せたのはこのような認識であり、詩「秋の犬」もまたこの認識の先にあると考えてみたい。詩人はハイデガーの存在論を念頭に次のようにも語っている。

即ち詩によって、こうした哀愁を感じるとき、存在は初めて人間の本質と全き関係を持ち、それ自身をあらわすと同時に、人間もまた真理の中に脱出して脱我的実存となる。

Existenzにおいて *ek*（外に）、*stare*（立ち出る）の状態になるという。この明るみのなかに、物は真に存在するものとして在ることが出来、人は現存在の本質である「実存」としての自己に会うことができるというのである（一三二頁）

抽象的な語りであって理解の齟齬もあるが、哀愁（悲哀）を感じることで物と人の存在の在り方に変化が生じる、ということか。秋の日のなかで、悲哀という感情のなかで、「ただ存続してきたバラバラな事物は、もはやそこにただ在るものではなく、互いに関連して」（一三三頁）存在するようになる。「秋の犬」

に戻ってまとめるなら、「神さまに似た人」はもう見いだせない悲哀の世界で、私は常に認識してきたような「私」のままの存在ではなくなり（「脱我」）、私でもあり、犬でもあり、物でもあるようになる。また、死体についても次のような詩（「死」）を詩人は書いている。

わたしの屍体が／さみしい茨のなかにころがっていると／やがて 誰かが近づいてきた／「略」／魂が わたしを探しにきた（一〇九頁）

死体もまた悲哀のなかで主体的に語る存在となる。どうやら村野四郎の詩においては哀愁、悲哀といった感情が重要なようで、その思いを掻き立てるのが詩人の考える秋なのだろう。秋は別の詩、例えば「九月のバストラル」においては「あの世とこの世の境目が澄み」（三三三頁）と語られ、また別の詩「秋の化石」においては「ふっと 幻覚してみるのも 秋／没落の季節のゆえであろうか」（二二八頁）と語られている。人が犬でもあるという認識は幻想であろうが、それを偽りとはしないのが悲哀の感覚。ある朝、目を覚ますと甲虫に姿を変えていたカフカの「グレゴールのことが／いつまでも忘れられない」（七五頁）のも秋の日。詩人にとっての秋とはそのような存在変容の季節であることをまずは理解したい。

つづけて犬について見ていこう。先述のように、「おれ」は犬にもなれるのが村野の秋である。それではなぜ犬なのか。岡田隆彦は小論「実存への郷愁」の中で「単純に自己を感情移入した犬ではなくて、リルケの抱いたごとく、自己を表現することの仕組みや性格が重なっているところの比喩としての犬のほうに近い⁸⁾」と、村野の詩に度々登場する犬たちを念頭に、「詩人の年齢的変化」が投映される存在としての犬を見出している。このことに加えて「秋の犬」の理解のためには、例えば詩「日常の犬」の次のような部分を思い出すことも有効であろう。

あれが 向うをむいて歩み去るときは／いまにも永遠の中へ消えそうに見える／そして ふいに立ちどまって／こちらの方を振りむくとき／私たち家族の心臓は 真青になる／それはもう まったく犬ではないから (五〇—五一頁)

「秋の犬」では「おれ」が犬だか物だか死体だか不明となったのだが、「日常の犬」では犬が「もう まったく犬ではない」。この否定の辞は大事に思われる。詩「秋の犬」では、登場する「おれ」を犬として読もうとすると「犬のように」という言葉が挟まれ、「おれ」＝犬という同一性が否定される。「おれ」＝人として読もうとすると「熱い舌を垂らしていた」と犬のような描写が示され、置物して読もうとすると「それは蛔虫といっしょ

に／おれの内部にしか無いということ」という一節が「おれ」＝置物という認識をやはり否定していた。先にも引いた「ただ存続してきたバラバラな事物は、もはやそこにただ在るものではなく、互いに関連して」存在するという詩人の志向を思い出すなら、どうやら「秋の犬」という詩は、「おれ」は犬であり、置物であり、死体であり、犬でなく、置物でなく、死体でないという感覚自体を伝える詩だと一応は結論づけられる。慣れ親しんだ同一性の感覚は否定され、別の存在の在り様が詩として探求されているとも言えそうなのだが、ではなぜ犬なのか。「秋の犬」の詩には次のような連があった。

何かやさしいものが／耳もとを掠めていったが／振りむいてみようとしなかった／はじめから おれには主人がなかったことを／憶えきれないほど多くの不幸が／おしえていて呉れたからだ

先に引いた詩「日常の犬」では犬は振り向き、「私たち家族の心臓は 真青になる／それはもう まったく犬ではないから」という驚きを生んでいた。しかし、「秋の犬」では振り返りもない。もはや、それが既に犬でないのか、人でないのか、教えてくれる誰かはいない。主人の不在。この事実を強調し、刻印する存在であるからこそその犬なのだろう。村野四郎は「秋の犬」

以前にも、「私は朝の世界の百のものの主人だ 然し私は既に一つのもの下僕だろう」(三六二頁)と、主従関係が変化する詩を書いている。「秋の犬」では関係の変化ではなく、存在が変化する。しかも、その変身は誰にも気づかれぬ。「おれ」は人なのか、犬なのか、物なのか、死体なのか、何なのか、が問われていたわけだが、いずれでもあり、いずれでもない、それを確定してくれる神さまはいない、というのが答えになるうか。

本節では秋と犬についての村野四郎の別の詩や言説を参照にその言葉の意味合いを検討したわけだが、物や死体についても同じように理解を深めることは可能である。村野四郎は「捨てられたブロンズ」(「抽象の城」)では、捨てられた物の語りが意識されているし、「おれ」＝死体説についても既に引いた詩「死」(「亡羊記」)において、死体が語る想像を詩人は明示している。「おれ」＝人、「おれ」＝犬、「おれ」＝置物、「おれ」＝死体。どの説も否定され、どの説も肯定されるのである。本節は講演での質疑応答を受けての浅慮たる返答に過ぎぬが、「秋の犬」という詩の深みを覗くだけでなく、村野四郎の詩の存在論——別の詩では植物にもなり、魚にもなる——の豊かさに踏み入るための契機になつていれば有難い。

おわりに

本論は講演の大部分をそのまま記載し、また、質疑応答の時

間を受けての村野四郎「秋の犬」の解釈を連ねる不定形な試みであった。講演自体は、詩を自由に読むことの楽しさを伝えることがねらいであり、補足の「秋の犬」論と共にそのことが伝わればよいものの、論として発展させるのであれば課題は多い。本論で示したような詩はまず自由に解釈するべき、という一つの主張は、例えば鈴木泰忠・高木信・助川幸逸郎・黒木朋興編『国語教育』とテキスト論(ひつじ書房、二〇〇九年)に収められた教育とテキスト論を関連づける論考とどのように響き合うのか。本論は文学教育についての論文を指摘したのではなかったが、単なる主張をどのように普遍化できるのか、という難題は残る。

大学における文学の授業では時に、作品の魅力といった曖昧な感覚よりも事実の解説が要求される。無論、正確に読む教育は大事である。対象作品を当時あるいは現代の社会的な事象と結びつけ、その作品・言葉の時代性や意義を見出していく説明も大事である。詩や小説が複数の解釈によって豊かになることが私は楽しいが、学生たちが望むのは別の話なのかもしれない。しかしながら、解説よりも作品そのものを読み味わうこと。古今の文芸作品を読むことに喜びを感じられる力。そして、自らの読解の喜びを人に伝え、共有し合う大学の時間。こういった享受と共有の感覚を学生も教員も身につけるために、どのような授業が可能であるのか、実践による検討をつづけたい。

注

- (1) 本稿の講演録の部分(第一節から第四節)は原則講演の通りの掲載とする。但し、資料一「ナシテ、モーネン」の解説の箇所は、引用が多く増長になるため割愛している。質疑応答も再現が困難なことから割愛している。なお、講演録中に「画面」とあるのは、当日使用した PowerPoint のスライドのことを指す。
- (2) 資料は注の後に記載。但し、資料一の本文は割愛。
- (3) 講演では詩「ナシテ、モーネン」を「小泉セツという人物の思いを詩にした作品」と述べているが、伊藤比呂美の体験や思いも反映している。詳しくは、跡上史郎「小泉セツから伊藤比呂美へ―「ナシテ、モーネン」と説教節―」『近代文学論集』第三七号、二〇一一年十一月。詩中に出てくる「アクセントのない言語」についての考察も同論文を参考にして講演では解説した。
- (4) 「憑依させて」と書いたが、伊藤比呂美の詩を評するのに「巫女的」といった言葉をしぼしば見かける。小池昌代は伊藤の朗読をCDに収めた『やさしい現代詩』(三省堂、二〇〇九年)において同詩を「わたし」の身体に侵入してきた英語体験を詩にしたもの。小泉セツに我が身を重ね、「声を借りる」方法はこの詩人ならではの(三九頁)と評している。
- (5) 前掲の『やさしい現代詩』付属CD。YouTubeは、伊藤比

呂美「ナシテ、モーネン」<https://www.youtube.com/watch?v=JH4QV7GYM> (二〇一三年十二月二日閲覧)。

- (6) 川島葵『さら水』ふらんす堂、二〇一八年、七五頁。
- (7) 村野四郎『現代詩読本』河出書房、一九五四年、二〇二―二〇三頁。
- (8) 村野四郎『村野四郎全詩集』。なお、本論における村野四郎の詩及び文章の引用はすべて同書によるため、頁数のみ本文内に記載する。
- (9) 岡田隆彦「実存への郷愁―詩への問いかけとしての」『村野四郎詩集』思潮社、一九八七年、一四七―一四八頁。

資料及び参考文献

資料一から三の当日配布した資料を、行分けを詰めたかたちで掲出しておく。但し、資料一の伊藤比呂美「ナシテ、モーネン」については文章量が多く、かつ本論との関わりが少ないので割愛する。

資料一 伊藤比呂美「ナシテ、モーネン」『わたしはあんじゅひめ子である』思潮社、一九九三年

資料二 村野四郎「秋の犬」『実在の岸边』創元社、一九五二年
夏桃のくろい茂みが虫にくわれて／そのむこうから／空が割がれてきた／／街には コスモスが／恋愛のように咲いたりして

いた／だが神さまに似た人は／ひとりも通らなかつた／／とある道端の 積みかさなつた石塊（いしころ）の間に／おれは犬のようにすわつていた／ガラスの眼球に桔梗の空間がうつつていた／／けれども おれは知つていた／永遠などというものは／結局 どこにも無いということ／それは蛔虫といつしよに／おれの内部にしか無いということを／何かやさしいものが／耳もとを掠めていつたが／振りむいて見ようともしなかつた／／はじめから おれには主人がなかつたことを／憶えきれないほどの多くの不幸が／おしえていて呉れたからだ／／おれは熱い舌を垂らしていた

資料三 草野心平「秋の夜の会話」『第百階級』銅鑼社、一九二八年

さむいね。／ああさむいね。／蟲がないてるね。／ああ蟲がないてるね。／もうすぐ土の中だね。／土の中はいやだね。／瘦せたね。／君もずあぶん瘦せたね。／どがこんな切ないんだらうね。／腹だらうかね。／腹とつたら死ぬだらうね。／死にたかあないね。／さむいね。／ああ蟲がないてるね。

- ・村野四郎『現代詩読本』河出書房、一九五四年
- ・『無限 特集・村野四郎』一九七〇年九月
- ・菊田守『村野四郎ノート』私家版、一九七五年
- ・村野四郎『定本村野四郎全詩集』筑摩書房、一九八〇年

・村野四郎『村野四郎詩集』思潮社、一九八七年

・鈴木泰恵・高木信・助川幸逸郎・黒木朋興編『国語教育』とテクスト論』ひつじ書房、二〇〇九年

・小池昌代ほか編『やさしい現代詩 自作朗読CD付き』三省堂、二〇〇九年

・跡上史郎「小泉セツから伊藤比呂美へ」『ナシテ、モーネン』と説教節―』『近代文学論集』第三七号、二〇一一年十一月

・坪井秀人『性が語る 二〇世紀日本文学の性と身体』名古屋大学出版会、二〇一二年

・長谷川洋二『八雲の妻 小泉セツの生涯』今井書店、二〇一四年

・川島葵『さら水』ふらんす堂、二〇一八年

※本稿は二〇二三年十月十八日に金城学院大学にて開催された二〇二三年度日本語日本文化学会秋季大会講演会の講演原稿に加筆修正を加えた論考である。

（ふじた・ゆうじ 本学文学部准教授）